P-3478-01-S504

リモート IO ME1000 シリーズ

コンフィグレータ
ME1000-CNFG

取扱説明書

2010 年 2 月 26 日　　Ver.0.0.8

エムティティ株式会社

目次

1 概要 1

2 動作環境 2

2-1 ハードウェア構成 2
2-2 PCの推奨スペック 3
2-3 IPアドレスの設定方法 4
2-4 ソフトウェア動作環境 6
2-4-1 インストール 6
2-4-2 パラメータファイル 8

3 コンフィグレータ機能一覧 9

4 画面の見方 10

4-1 起動画面 10
4-2 ユニットツリー 12
4-3 パラメータビュー 12
4-4 エラー・ユニット情報ビュー 12

5 メニュー 13

5-1 ME1000メニュー 13
5-2 RIOメニュー 14
5-3 通信ユニットメニュー 15
5-4 IOユニットメニュー 16

6 操作方法 17

6-1 ネットワーク情報設定 17
6-2 IOユニットのパラメータ設定 18
6-3 POT調整 20

7 運用例 22

7-1 システム導入時 22
7-2 メンテナンス時 24

8 アイコン表示 28

8-1 RIOアイテム 28
8-2 通信ユニットアイテム 28
8-3 IOユニットアイテム 29

1 概要

本アプリケーションはリモート IO　ME1000 シリーズ変換器のコンフィグレーションを行うアプリケーション（以下、コンフィグレータ）です。
本書はコンフィグレータに関する取扱説明書です。

以下、RIO とは「電源ユニット（最大 2 個）、通信ユニット（最大 2 個）、IO ユニット（最大 10 個）、終端モジュール（左右）のセット」であることを指します。

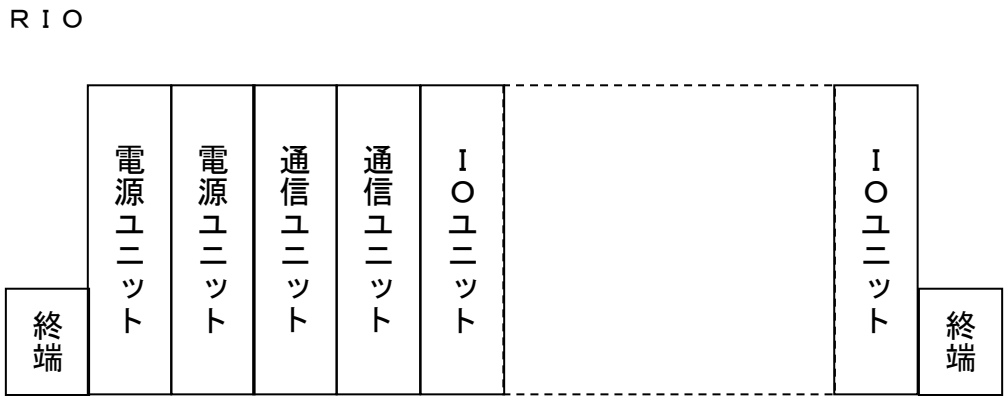


図 1-1 RIO

2 動作環境

2-1 ハードウェア構成

リモート IO システム構成を下図に示します。

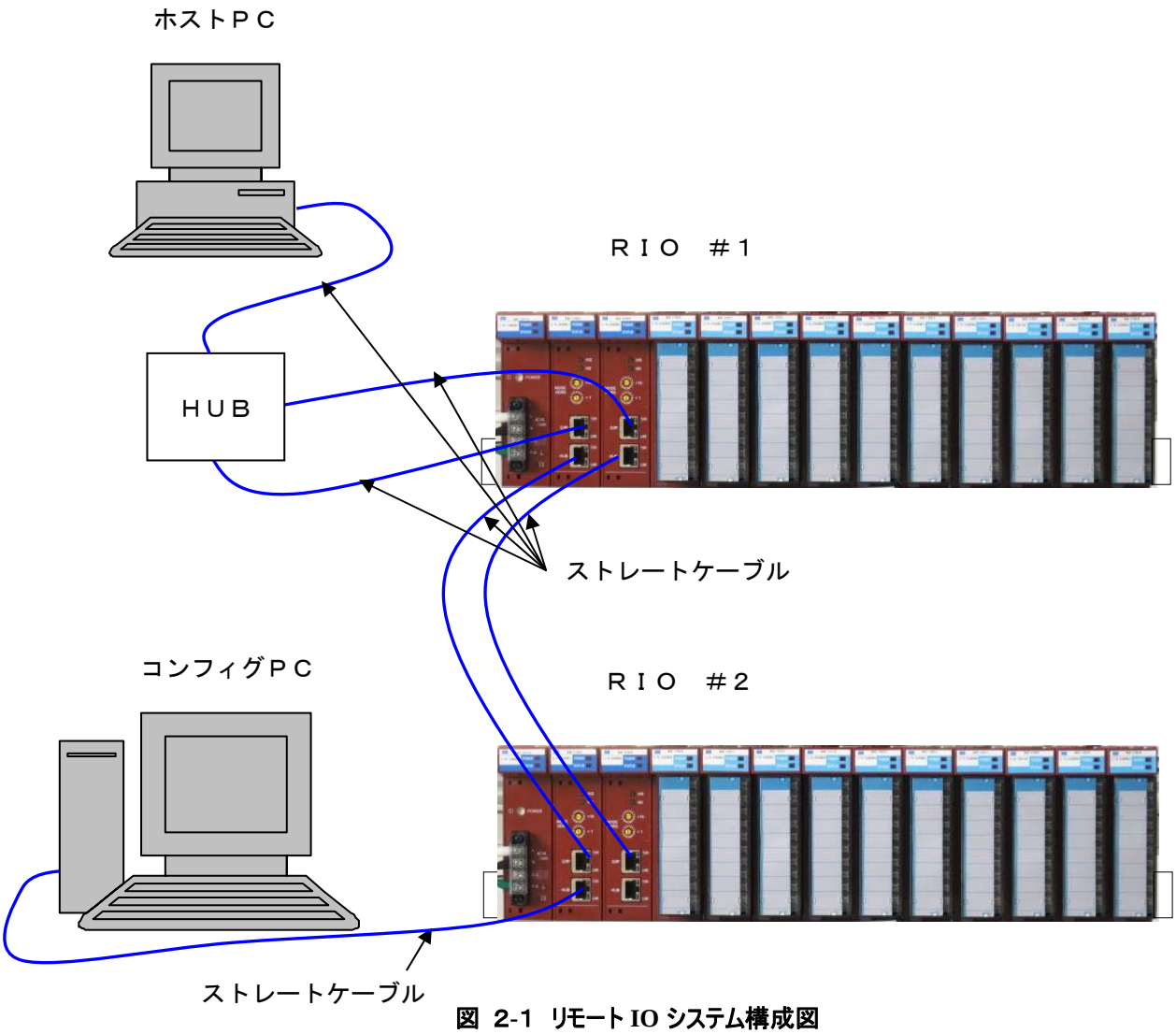


図 2-1 リモート IO システム構成図

リモート IO システムは、ホスト、RIO の構成としており、RIO126 台まで使用することができます。
接続は、「システム取扱説明書 P-3478-01-S950」をご参照ください。

注意　コンフィグ PC は、通信ユニットの E/IP のポートに接続する時はクロスケーブル、
　　通信ユニットの HUB のポートに接続する時はストレートケーブルをご使用ください。

2-2 PC の推奨スペック

推奨する PC のスペックを下表に示します。

表 2-1 推奨スペック

OS	WindowsXP SP2 以上、Windows2000 SP2 以上
CPU	Pentium3 の 733MHz 以上
HDD の空き容量	1MByte 以上
メモリ	128MByte 以上
ネットワーク	RJ-45 コネクタ、100BASE
ディスプレイ解像度	1024×768 以上

2-3 IP アドレスの設定方法

WindowsXP でのコンフィグ PC の IP アドレス設定方法を以下に示します。

（1）「Windows のスタートメニュー」→「アクセサリ」→「通信」→「ネットワーク接続」を開きます。
（2）ローカルエリア接続のプロパティを開きます。

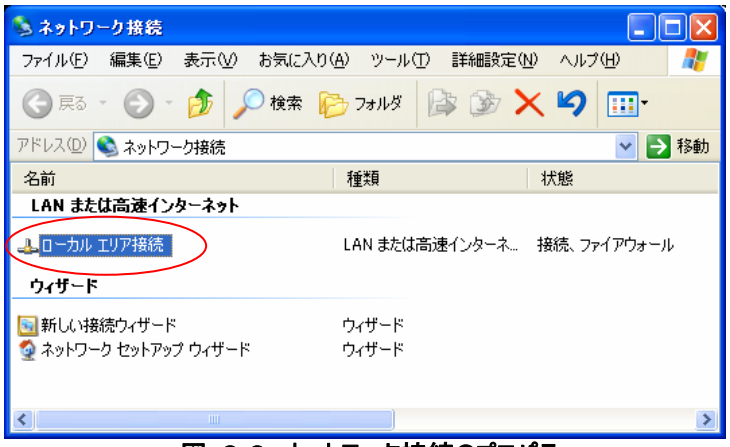


図 2-2 ネットワーク接続のプロパティ

（3）インターネット プロトコル(TCP/IP)のプロパティを開きます。

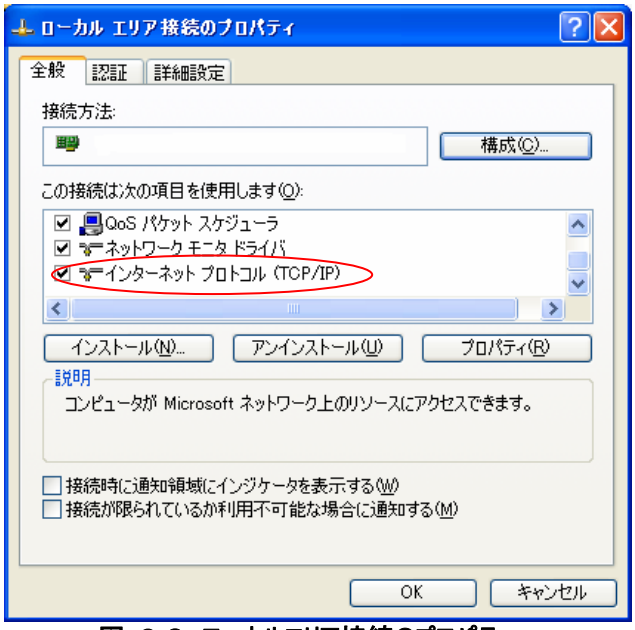


図 2-3 ローカルエリア接続のプロパティ

（4）全般タブにて「次の IP アドレスを使う」を選択し、「IP アドレス」および「サブネット マスク」を設定します。
ネットワーク上の IP アドレスと重複しないようご注意ください。

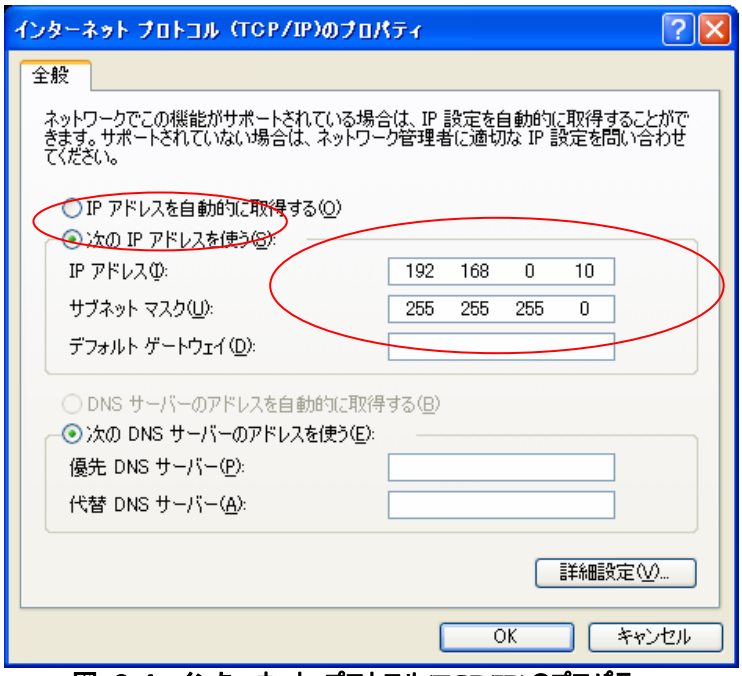


図 2-4 インターネット プロトコル(TCP/IP)のプロパティ

2-4 ソフトウェア動作環境

2-4-1 インストール

供給するメディアは、CD-ROM1枚です。

（1）CD-ROM を CD ドライブに挿入し、Windows のスタートボタンから「ファイル名を指定して実行」を選択するか
エクスプローラから選択し、setup.exe を起動します。

図 2-5 インストーラ起動

（2）インストール先フォルダを指定します。初期設定は”C:¥ME1000”です。
変更する場合は「参照」ボタンをクリックし、フォルダを選択するか、直接指定してください。

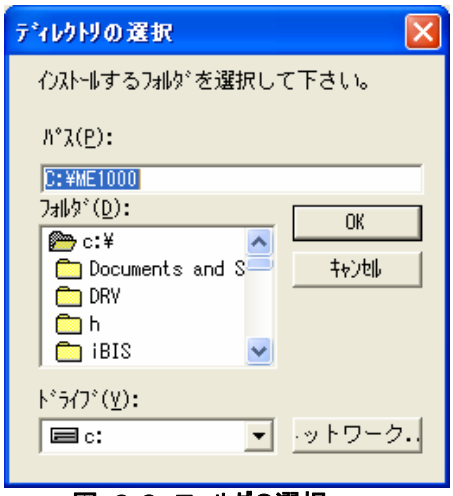


図 2-6 フォルダの選択

（3）インストールを開始します。
　インストール先フォルダを確認し、「次へ」ボタンをクリックしてください。

図 2-7 インストール先フォルダの確認

（4）インストール後は必ず再起動を行ってください。

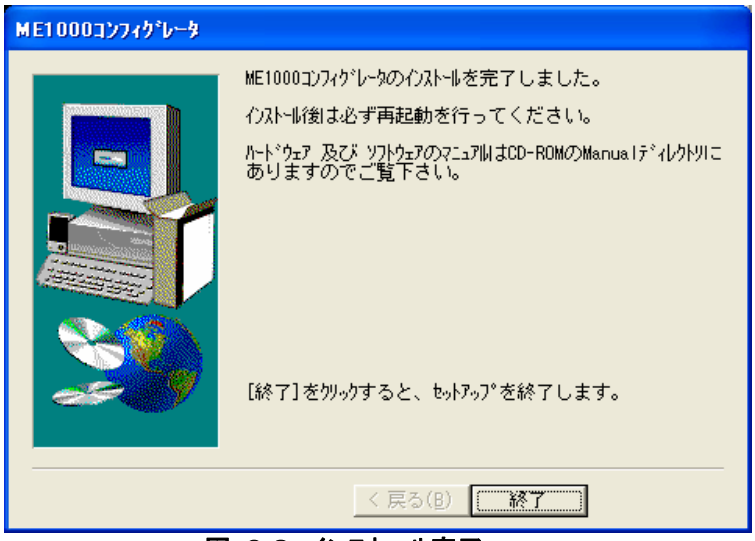


図 2-8 インストール完了

インストーラはコンフィグレータのインストールフォルダ以外にシステムフォルダとして C:¥MttRio フォルダを自動作成します。
このフォルダは ME1000 システムで動作するコンフィグレータおよび PcVue（別売）の共通フォルダとなっています。
フォルダ内のファイルおよびフォルダ名の編集はお避けください。

2-4-2 パラメータファイル

パラメータファイルに「通信ユニットへの接続先情報・IO ユニットへの設定情報」を保存しています。
起動時にはこのファイルから接続情報をコンフィグレータが取り込み、接続します。
デフォルトのインストールではインストーラがパラメータファイルを以下の場所にコピーします。
C¥MttRio

注意　このフォルダ内のファイルを変更しないでください。
もし、変更されるとシステムが正しく動作しなくなります。
PC の不具合等が発生した場合に備え、バックアップを取るようにしてください。

3 コンフィグレータ機能一覧

コンフィグレータの機能には主に設定とデータ取得があります。

表 3-1 機能一覧

分類	機能名	説明
設定機能	IP アドレス情報設定	IP アドレスのネットワークアドレス部の設定を行えます。
	入力種別設定	各 IO 種別で定義した入力種別を設定することができます。
	入力レンジ設定	各入力種別に合った入力レンジを設定することができます。
	バーンアウト設定	バーンアウト発生時の動作に対応した設定することができます。 ※HiV の場合は設定できません。
	POT 調整	POT の場合に 0%基準値と 100%基準値の調整を行なうことができます。
データ取得機能	プロセスデータ取得	別画面でプロセスデータを表示することができます。 プロセスデータは周期的に更新します。 また、TC の場合は端子台温度も同時に取得できます。
	エラー取得	エラーが起こっている場合は発生しているエラーの詳細を確認することができます。
	ユニットパラメータ取得	ユニットにどのようなパラメータを設定しているか確認することができます。

4 画面の見方

4-1 起動画面

RioConfig.exe をダブルクリックし、コンフィグレータを起動すると次の画面を表示します。

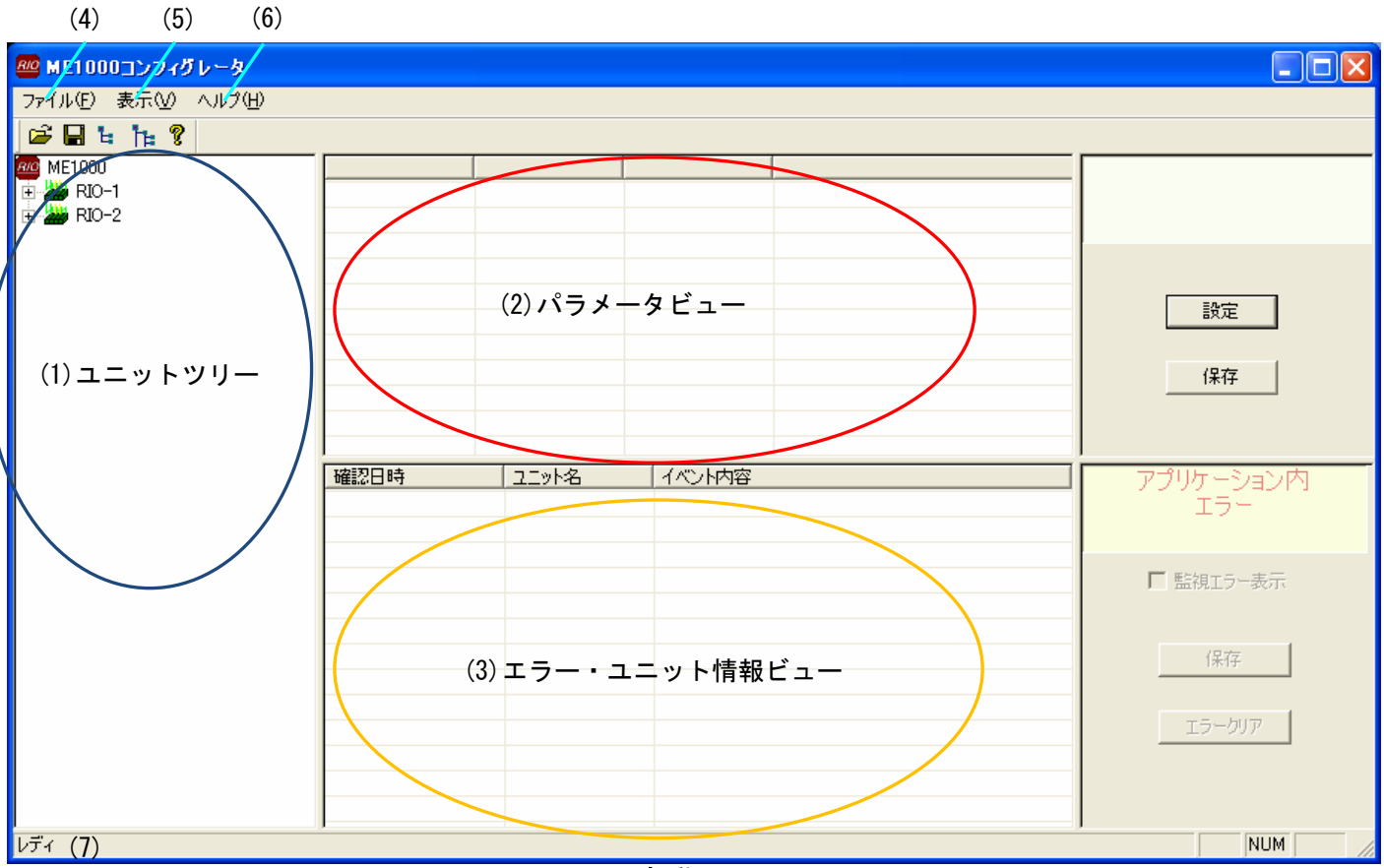


図 4-1 起動画面

(1) ユニットツリー
パラメータファイルから読み込んだリモート IO システムの構成を表示します。
設定対象であるユニット(RIO、通信ユニット・IO ユニット)を選択し、各種設定を行います。

(2) パラメータビュー
各 IO ユニットの設定内容や通信ユニットの接続情報など、コンフィグレータが保持するパラメータ情報を表示します。
右側のラベルにはパラメータビューの表示内容のタイトルを表示します。

(3) エラー・ユニット情報ビュー
ホスト側・ユニットのエラー情報及びユニットのパラメータ情報を表示します。
右側のラベルにはエラー・ユニットビューの表示内容のタイトルを表示します。

(4)「ファイル」メニュー

(a) ファイル→ファイル読み込み
パラメータファイル(param.csv)から読み込みます。

(b) ファイル→保存
パラメータファイル(param.csv)へデータを上書き保存します。

(c) ファイル→終了
アプリケーションを終了します。

(5)「表示」メニュー

(a) 表示→ツールバー
ツールバーの表示／非表示を切り替えます。

(b) 表示→ステータスバー
ステータスバーの表示／非表示を切り替えます。

(c) RIO アイテム展開
ユニットツリーの RIO アイテムを展開します。

(d) RIO アイテム縮小
ユニットツリーの RIO アイテムを縮小します。

(6)「ヘルプ」メニュー

(a) ヘルプ→バージョン情報
コンフィグレータのバージョン情報を表示します。

(7) ステータスバー

メニュー選択時に選択したメニューの説明を表示します。

4-2 ユニットツリー

ユニットツリーのRIOアイテムを展開すると
図 4-2 のようにパラメータファイルから読み込んだ
システム構成を表示します。
RIO アイテムの下には通信ユニットアイテムが
2台構成の場合は 2 個、1 台構成の場合は 1 個、
IO ユニットアイテムを 10 個表示します。
アイテムのアイコンについては8章をご参照ください。

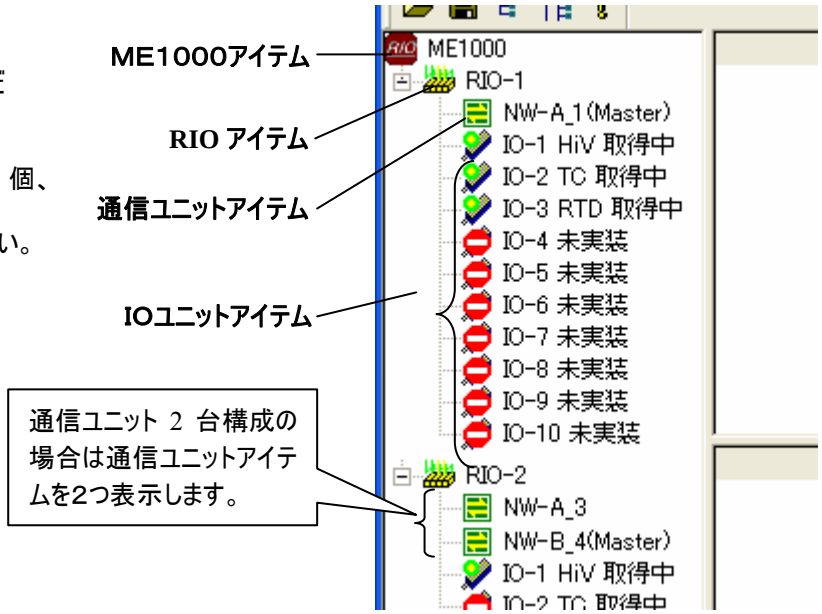


図 4-2 ユニットツリー

4-3 パラメータビュー

IO-No.	IO種別	入力種別	入力min	入力max	バーンアウト	バーンアウト時間
1	HiV	0~10V	0.00V	10.00V	---	---
2	TC	J	0.00℃	10.00℃	up	1秒
3	RTD	Pt100 1997	0.00℃	25.00℃	up	2秒
4						
5						
6						
7						
8						
9						
10						

図 4-3 パラメータビュー表示例

上図のように、パラメータファイルから読み込まれたパラメータ情報を RIO 単位で表示します。

4-4 エラー・ユニット情報ビュー

IO-No.	IO種別	入力種別	CH1エラー	CH2エラー	CH3エラー	CH4エラー
1	HiV	0~10V	レンジ外データ		レンジ外データ	レンジ外データ
2	TC	E	バーンアウト...	バーンアウト...	バーンアウト...	バーンアウト...
3	RTD	Pt100 1997	レンジ外データ	レンジ外データ	レンジ外データ	レンジ外データ
4	---					
5	---					
6	---					
7	---					
8	---					
9	---					
10	---					

図 4-4 エラー・ユニット情報ビュー表示例

上図のようにユニットに設定している情報を RIO 単位で表示します。

5 メニュー

5-1 ME1000 メニュー

ユニットツリーの ME1000 アイテムを右クリックすると ME1000 メニューを表示します。
ME1000 メニューからはシステム全体をまとめて操作します。

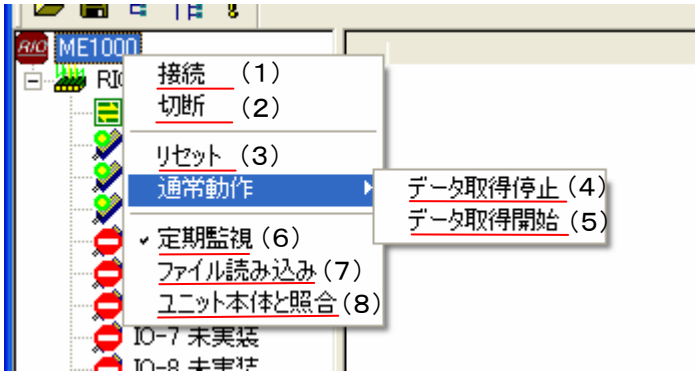


図 5-1 ルートアイテムメニュー

(1)接続
システムの全通信ユニットと接続します。

(2)切断
システムの全通信ユニットを切断します。

(3)リセット
システムの全 IO ユニットをリセットし、再起動します。

(4)通常動作→データ取得停止
全 IO ユニットのプロセスデータの取得を停止します。
？マークのついた IO がない場合、データ取得を停止できます。

(5)通常動作→データ取得開始
全 IO ユニットのプロセスデータの取得を開始します。
？マークのついた IO がない場合、データ取得を開始できます。

(6)定期監視
チェックすると、IO ユニットの実装状態・IO 種別・入力種別・エラー情報、通信ユニットの接続状態・エラー情報を周期的に取得し、ユニットツリーの表示を更新します。

(7)ファイル読み込み
パラメータファイルを選択した場合、接続している通信ユニットを切断し、新たにパラメータファイルを読み込み、起動時と同様に接続します。エラーファイルを選択した場合、エラーファイルを読み込みます。

(8)ユニット本体と照合
コンフィグレータが保持するすべての IO ユニットの実装情報、入力種別、入力レンジ、バーンアウト情報をユニット本体と合わせます。

5-2 RIO メニュー

ユニットツリーの RIO アイテムを右クリックすると、RIO メニューを表示します。
RIO メニューでは IO ユニット 10 台まとめての操作や RIO の名称変更を行います。

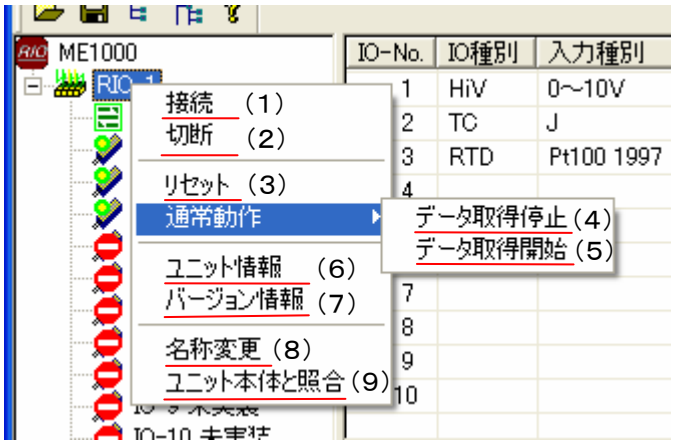


図 5-2 RIO アイテムメニュー

(1)接続
選択している RIO の全通信ユニットと接続します。

(2)切断
選択している RIO の全通信ユニットを切断します。

(3)リセット
選択している RIO の全 IO ユニットをリセットし、再起動します。

(4)通常動作→データ取得停止
選択している RIO の全 IO ユニットのプロセスデータ取得を停止します。
？マークのついた IO がない場合、データ取得を停止できます。

(5)通常動作→データ取得開始
選択している RIO の全 IO ユニットのプロセスデータ取得を開始します。
？マークのついた IO がない場合、データ取得を開始できます。

(6)ユニット情報取得
選択している RIO の全 IO ユニットの入力レンジ・バーンアウトモード・バーンアウト移行時間を取得し、エラー・ユニット情報ビューへ表示します。

(7)バージョン情報
選択している RIO の全 IO ユニットのバージョン情報を表示します。

(8)名称変更
ユニットツリーに表示している RIO の名称を変更します。但し、コンマおよびダブルコーテーションは設定できません。

(9)ユニット本体と照合
選択している RIO にある、コンフィグレータが保持する IO ユニットの実装情報、IO 種別、入力種別、入力レンジ、バーンアウト情報をユニット本体に合わせます。

5-3 通信ユニットメニュー

通信ユニットメニューでは、通信ユニット単体に対する操作を行います。

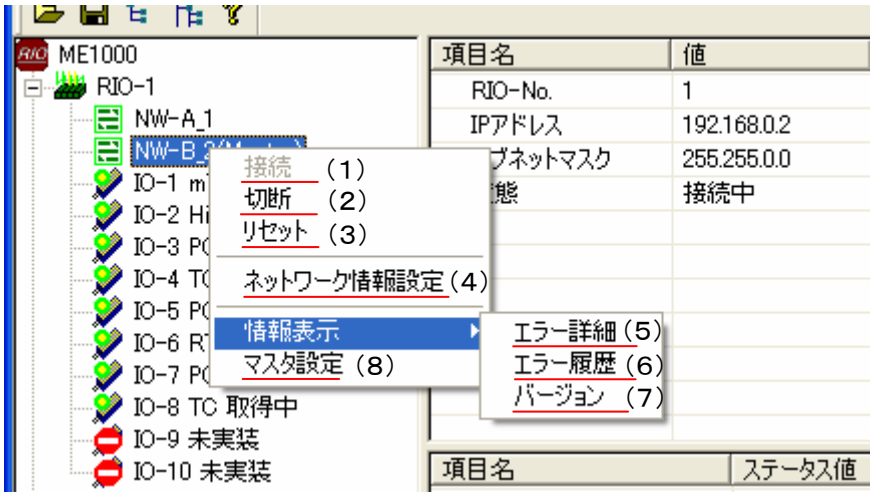


図 5-3 通信ユニットアイテムメニュー

(1)接続
選択している通信ユニットと接続します。

(2)切断
選択している通信ユニットを切断します。

(3)リセット
選択している通信ユニットをリセットし、再起動します。
再起動後、切断します。

(4)ネットワーク情報設定
ネットワーク情報設定画面を開き、選択している通信ユニットのネットワーク情報を設定します。設定が完了すると通信ユニットを切断します。

(5)情報表示→エラー詳細
選択している通信ユニットに発生しているエラー情報を取得し、エラー・ユニット情報ビューへ表示します。

(6)情報表示→エラー履歴
選択している通信ユニットのエラー履歴を取得し、エラー・ユニット情報ビューへ表示します。

(7)情報表示→バージョン
選択している通信ユニットの基板の版、基板の改訂履歴、F/W Ver.、ソフト Ver.、テーブル Ver.表示画面が現れます。

(8)マスタ設定
選択している通信ユニットをマスタに切り替えます。もう一台の通信ユニットは予備マスタになります。
※通信ユニット 2 台構成時のみ

5-4 IO ユニットメニュー

IO ユニットメニューでは、IO ユニット単体に対する操作を行います。

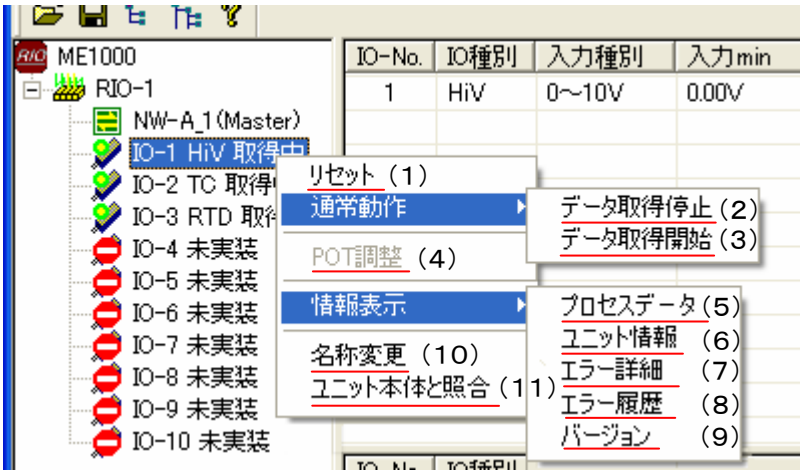


図 5-4 IO ユニットアイテムメニュー

（1）リセット
選択している IO ユニットをリセットし、再起動します。

（2）通常動作→データ取得停止
選択している IO ユニットのプロセスデータの取得を停止します。

（3）通常動作→データ取得開始
選択している IO ユニットのプロセスデータの取得を開始します。

（4）POT 調整
選択している IO ユニット（POT）の 0%基準値・100%基準値を設定することができます。
※POT 以外の IO ユニットは項目を選択できません。

（5）情報表示→プロセスデータ
プロセスデータ表示画面が現れ、プロセスデータを表示し、周期的に更新します。
※プロセスデータ取得中にのみ項目が選択できます。

（6）情報表示→ユニット情報
選択している IO ユニットの入力レンジ・バーンアウトモード・バーンアウト移行時間を取得し、エラー・ユニット情報ビューへ表示します。

（7）情報表示→エラー詳細
選択している IO ユニットに発生しているエラー情報を取得し、エラー・ユニット情報ビューへ表示します。

（8）情報表示→エラー履歴
選択している IO ユニットのエラー履歴を取得し、エラー・ユニット情報ビューへ表示します。

（9）情報表示→バージョン
選択している IO ユニットのファームウェアバージョン・システムバージョン表示画面が現れます。

（10）名称変更
ユニットツリーへ表示する IO ユニットの名称を変更します。但し、コンマおよびダブルコーテーションは使用できません。

（11）ユニット本体と照合
コンフィグレータが保持する、選択した IO ユニットの実装情報、IO 種別、入力種別、入力レンジ、バーンアウト情報をユニット本体に合わせます。

6 操作方法

6-1 ネットワーク情報設定

設定する通信ユニットアイテムのメニューから「ネットワーク情報設定」を選択し、「ネットワーク情報設定」画面を開きます。

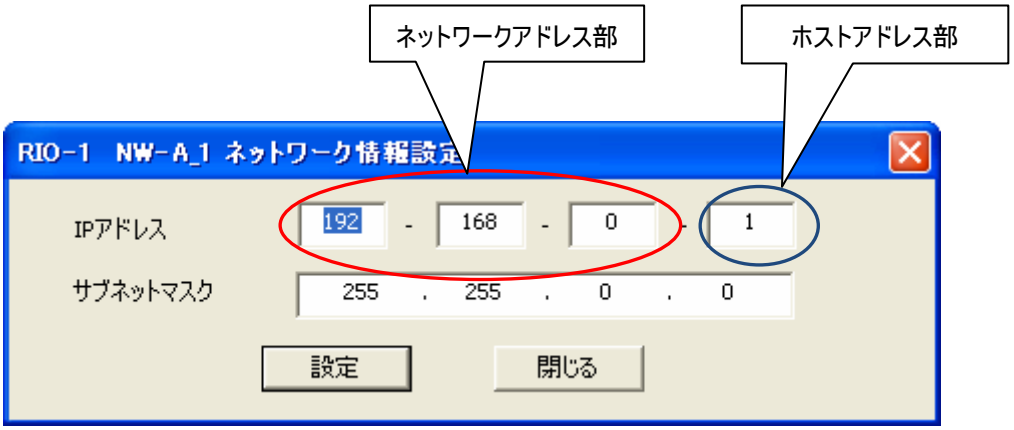


図 6-1 ネットワーク情報設定画面

尚、通信ユニットアイテムアドレス設定後、通信ユニットを切断します。

サブネットマスクについて

サブネットマスクを変更することによってシステム内の通信ユニット同士のアクセス範囲を変更することができます。
例えば IP アドレスが「192.168.0.1」、サブネットマスク値が「255.255.**255**.0」の通信ユニットの場合は、IP アドレスが「192.168.**0**.xxx」である通信ユニットしかアクセスできません。しかしサブネットマスク値を「255.255.**0**.0」とすることにより、IP アドレスが「192.168.**4**.2」である通信ユニットにもアクセスできるようになります。

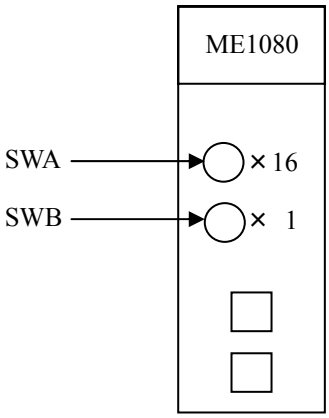
ホストアドレス部（ノードアドレス）変更について

設定ボタンを押すと、ロータリスイッチ変更確認画面を表示します。通信ユニットのロータリースイッチをノードアドレスに合わせてください。設定後、コンフィグレータを再起動すると変更したノードアドレスに接続します。

ノードアドレス ＝ SWA × 16 ＋ SWB

例 SWA → 0x2 (16 進数表現) = 2 (10 進数表現)
SWB → 0xF (16 進数表現) = 15 (10 進数表現)

47 ＝ 2 × 16 ＋ 15



6-2 IO ユニットのパラメータ設定

パラメータビューから IO ユニットのパラメータを設定します。

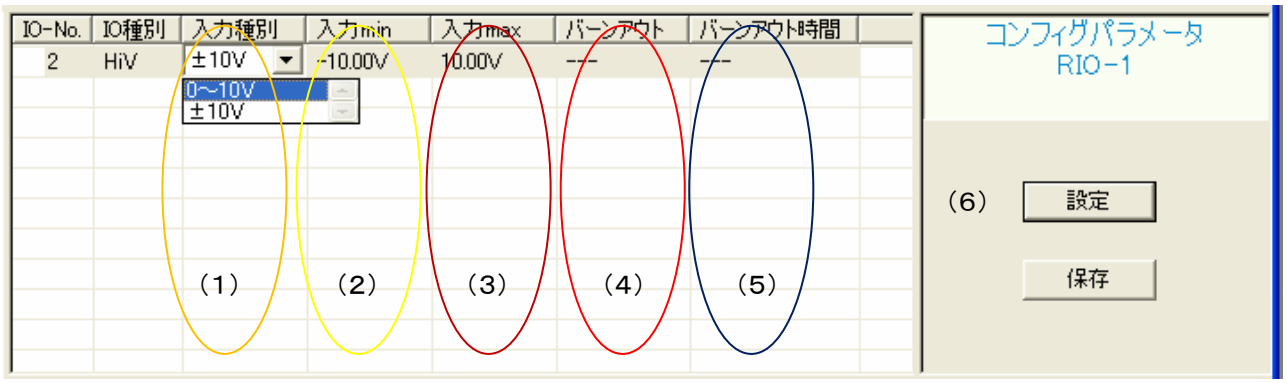


図 6-2 パラメータビューからの入力と設定

ユニットツリーでRIOアイテムをクリックすると図 6-2 パラメータビューからの入力と設定のように現在コンフィグレータが保持しているIOユニットのパラメータを表示します。

(1)入力種別
ダブルクリックすると入力種別選択ボックスが現れ、入力種別を選択することができます。

表 6-1 各入力種別と入力レンジ

IO 種別	入力種別	入力レンジ		単位
		下限値	上限値	
TC	K	-270	1370	℃
	E	-270	1000	
	J	-210	1200	
	T	-270	400	
	B	100	1820	
	R	-50	1760	
	S	-50	1760	
	N	-270	1300	
RTD	jPt100 1989	-200	500	
	Pt100 1997	-200	850	
	Pt50 1981	-200	649	
	Cu10at25	-50	250	
mV	0～10mV	0	10	mV
	0～100mV	0	100	
	±10mV	-10	10	
	±100mV	-100	100	
HiV	0～10V	0	10	V
	±10V	-10	10	
POT	0～100Ω	0	100	%
	0～10kΩ	0	100	

(2)入力 min
ダブルクリックするとテキストボックスが現れ、入力レンジの下限値を入力することができます。

(3)入力 max
ダブルクリックするとテキストボックスが現れ、入力レンジの上限値を入力することができます。

（4）バーンアウト
ダブルクリックすると「up/down/無効」のバーンアウトモードを選択できるボックスが現れます。
尚、HiV の場合は現れません。

表 6-2 モード

モード	説明
無効	バーンアウトなし
up	プロセスデータは入力上限値固定
down	プロセスデータは入力下限値固定

（5）バーンアウト時間
ダブルクリックするとバーンアウト時の上限、下限移行時間を「1 秒～10 秒」から選択できるボックスが現れます。
尚、HiV の場合は現れません。

（6）設定ボタン
（1）～（5）まですべて入力し終え、設定ボタンを押すと、選択している RIO の IO ユニット1番目から IO ユニット10番目までをまとめて設定することができます。
プロセスデータ取得中の IO ユニットがあると、“一時的にプロセスデータ取得を停止しますがよろしいですか？”のメッセージボックスが現れるので、“OK”を押すと設定を実行します。

※また、ユニットツリーで IO ユニットアイテムをクリックした場合も選択した IO ユニット単体に対し、同様のことが行えます。

6-3 POT 調整

※POT の場合のみ実行可能です。
POT 調整を始める前に IO ユニットアイテムメニュー→通常動作→データ取得停止　で
調整対象の IO ユニットのプロセスデータ取得を停止させてください。

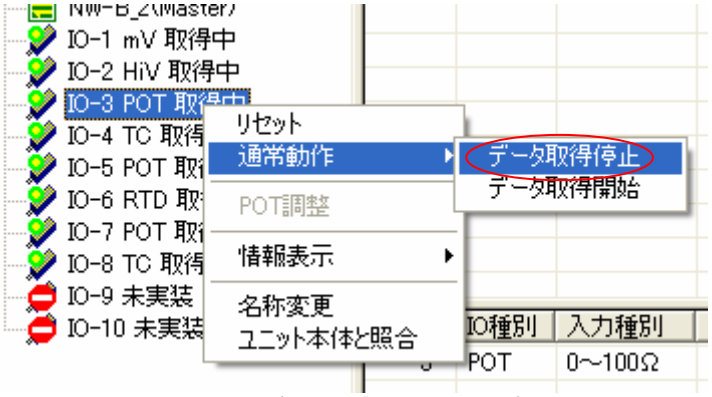


図 6-3 プロセスデータの取得と停止

（1）プロセスデータ取得停止をするとIOユニットメニューのPOT調整が選択できるようになります（図 6-4 POT調整項目）。
“POT調整”の項目を選択し、POT調整画面を表示します（図 6-5 POT調整画面 1）。

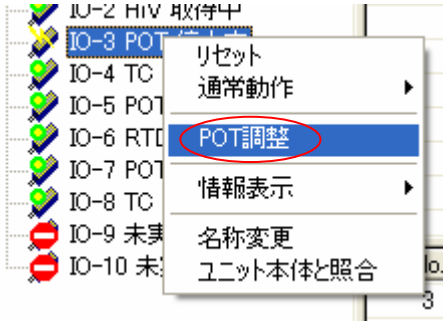


図 6-4 POT 調整項目

（2） 調整開始ボタンを押し、POT 調整を開始します。
各チャネルの調整ステータスは各チャネル毎にエディットボックスに表示します。
調整の手順については「ME1010 取扱説明書 P-3453-05-H08」をご参照ください。

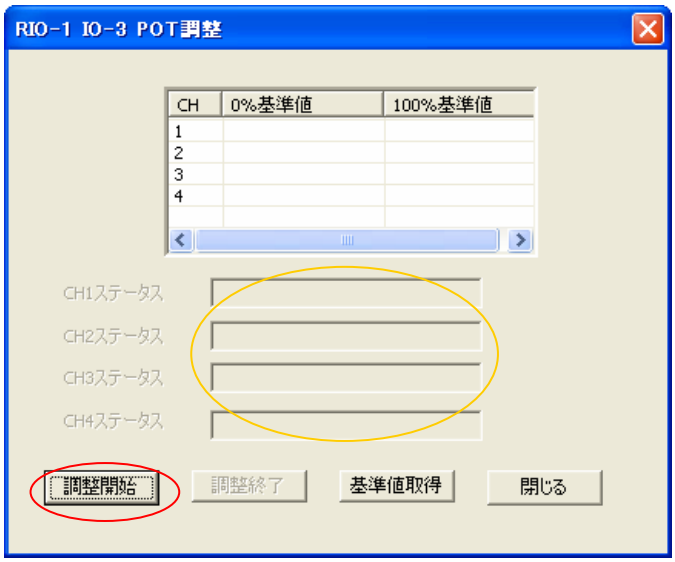


図 6-5 POT 調整画面 1

（3） 調整を終了したい場合は調整終了ボタンを押してください。

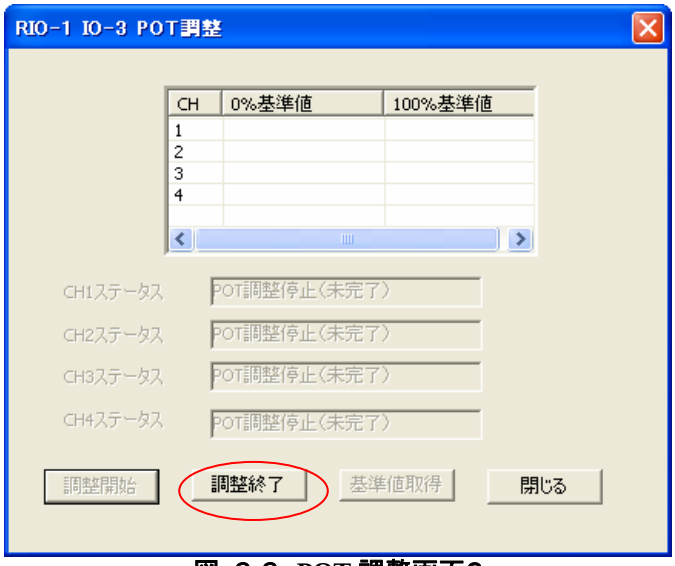


図 6-6 POT 調整画面2

（3） 基準値を確認したい場合は POT 調整中でない時に基準値取得ボタンを押してください。

7 運用例

7-1 システム導入時

（1）起動
RioConfig.exe をダブルクリックし、コンフィグレータを起動させます。
（2）システム構成の相違確認
ユニットツリーのシステム構成を確認します。
パラメータと IO ユニット本体に相違がある場合は IO ユニットアイテムに？マークのついたアイコンが現れます。

図 7-1 状態不明の IO ユニット

？マークのついたアイコンが現れた場合、次の状態が考えられます。

(a) パラメータにないが、IO ユニット本体が実装している状態
(b) パラメータにあるが、IO ユニット本体が未実装の状態
(c) パラメータの IO 種別と、IO ユニット本体の IO 種別が異なっている状態

(a)(b)(c)の場合は、図 7-1 状態不明のIOユニット？マークのついたIOユニットを選択します。
IO ユニットメニューから「ユニット本体と照合」を行い、ユニット本体にコンフィグレータの情報を合わせます。

図 7-2 実装情報の更新

（3）パラメータとユニット本体の相違を確認する

コンフィグレータの保持するパラメータ（起動時にはパラメータファイルに設定したパラメータ）とユニット本体のパラメータとの相違を確認します。

RIOメニューの「ユニット情報」を選択すると、図 7-3 ユニット本体のパラメータ表示のようにエラー・ユニット情報ビューに選択しているRIOのユニット本体のパラメータを表示します。

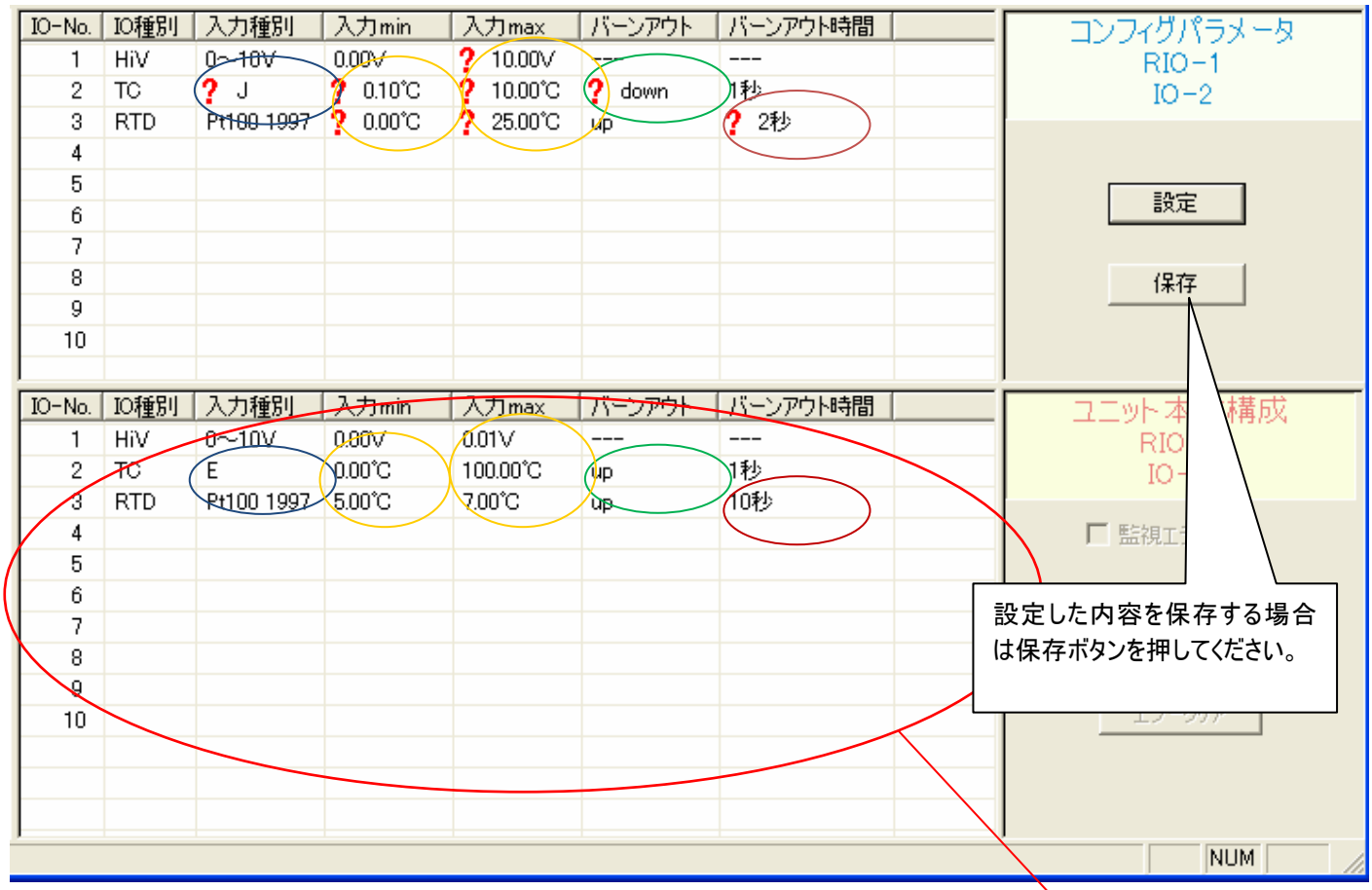


図 7-3 ユニット本体のパラメータ表示

このとき、ユニット本体と違った値があれば、その部分に？マークのアイコンが付きます。

変更する場合は「6-2 パラメータビューからの入力による設定」を参照し設定してください。

また、設定したパラメータ情報をパラメータファイルへ保存する場合は保存ボタンを押してください。パラメータファイルへ上書きします。

7-2 メンテナンス時

（1）エラー確認
ユニットツリーにてユニットのエラー発生状態を確認できます。
通信ユニットもしくは IO ユニットにエラーが発生すると、エラーが発生した
通信ユニット、IO ユニットおよび RIO アイテムに E マークが付きます。
（エラー回復すると消えます）
図 7-4 エラー発生中の通信ユニットの場合は通信ユニットにエラーが発生しています。

図 7-4 エラー発生中の通信ユニット

（2）エラー発生中の詳細情報の取得

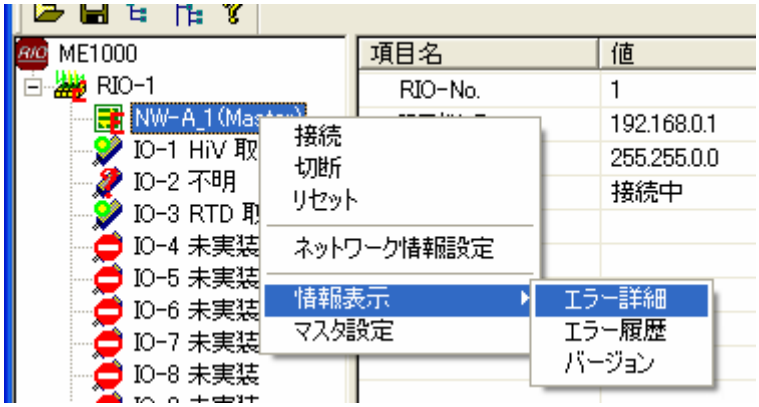


図 7-5 エラー詳細取得

エラー発生中の詳細情報を確認するには、確認したい通信ユニットもしくは IO ユニットのアイテムを右クリックし、
情報表示→エラー詳細の項目を選択します。
選択したユニットで発生しているエラー内容を表示します。

図 7-6 エラー詳細表示

（ｉ）監視エラー表示
監視エラー表示／非表示を切り替えます。

（ii）保存
表示しているエラー内容を保存します。

（iii）エラークリア
ユニット本体のエラーをクリアします。

（3）エラー内容の保存
　表示しているエラー内容をファイル保存するには「保存」ボタンを押します。

（4） 名前を付けて保存ファイルダイアログが出ますので、任意のファイル名を入力して“保存”ボタンを押してください。

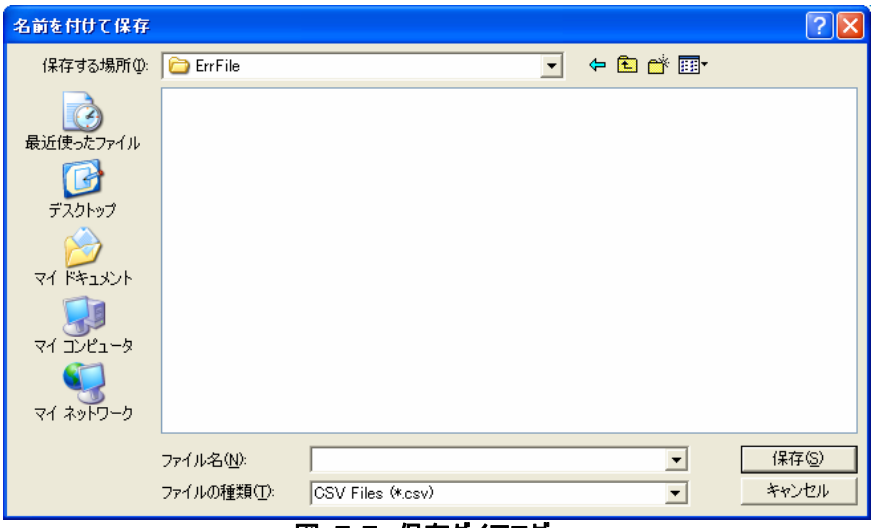


図 7-7 保存ダイアログ

（5）ユニットの交換・構成変更など
　ユニットの交換など、構成・IO 種別の変更があった場合は「7-1 システム導入時」のようにコンフィグレータの設定を行い、
　パラメータファイルへ保存してください。

（6）プロセスデータの確認

プロセスデータを確認したい時は、確認対象の IO ユニットメニューから「情報表示→プロセスデータ」を選択してください。

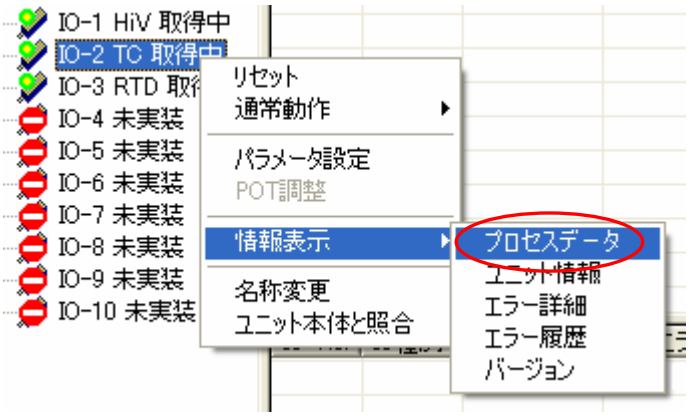


図 7-8 プロセスデータ項目

選択すると、プロセスデータ取得画面を表示し、プロセスデータを確認できます。

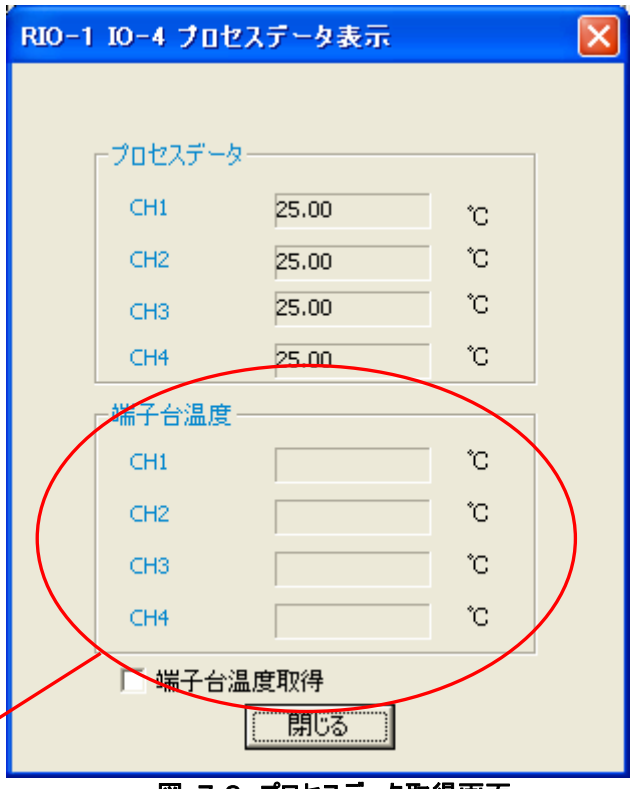


図 7-9 プロセスデータ取得画面

※1　端子台温度取得について

IO 種別が TC の場合は同時に端子台温度も確認できます。

通常動作停止中は自動的に端子台温度を取得しプロセスデータと合わせて表示します。

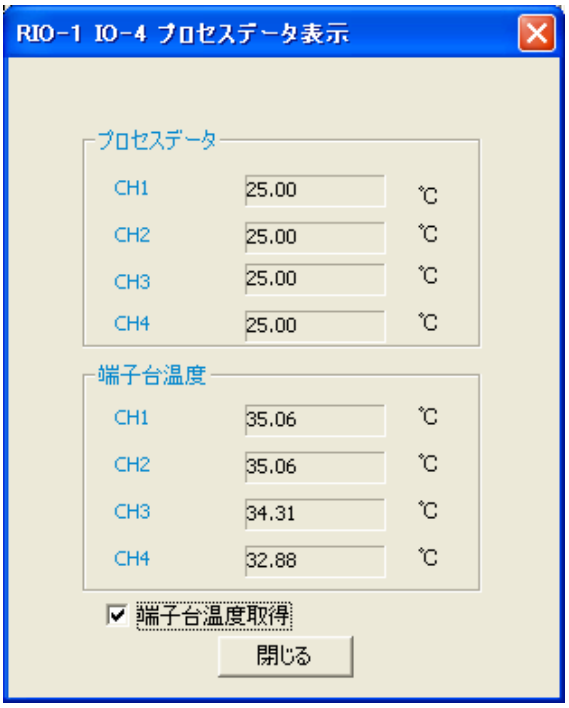


図 7-10　端子台温度表示

プロセスデータ取得中に端子台温度を確認する場合は、「プロセスデータ取得」画面左下部の「端子台温度取得」チェックボックスにチェックを入れると、図 7-11　端子台温度取得確認のようにメッセージを表示します。
OK を押すとプロセスデータ取得を一時停止しながら周期的に端子台温度を取得し表示します。チェックをはずすと取得しません。

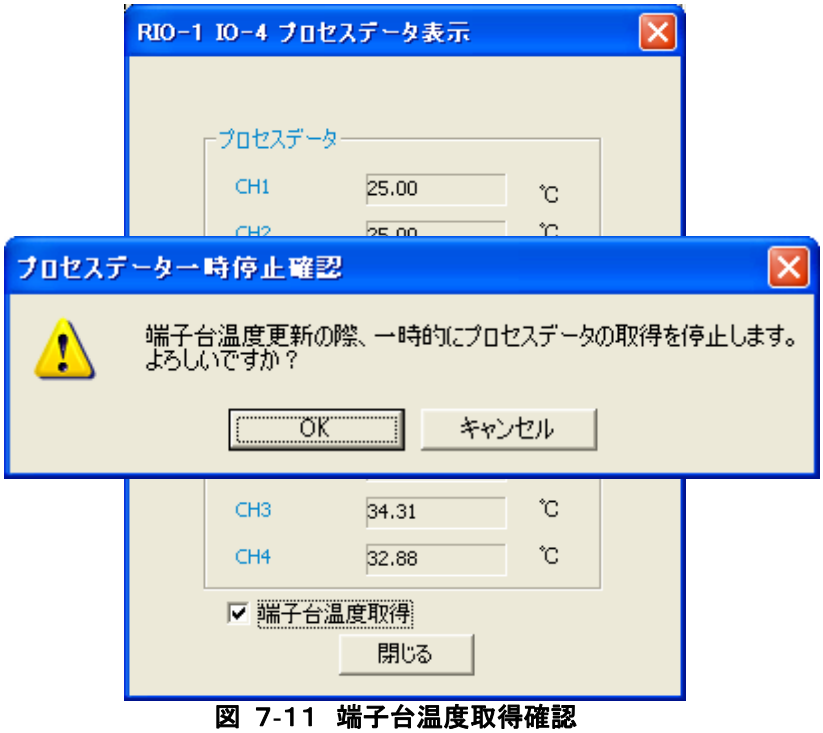


図 7-11　端子台温度取得確認

8 アイコン表示

ユニットツリーに表示する情報はアイテムに表示するアイコンによって各ユニットの状態を表します。
それぞれのアイテムのアイコンと状態を以下に記述します。

8-1 RIO アイテム

表 8-1 RIO アイテムのアイコン表示と状態説明

アイコン	状態
	この RIO において接続中の通信ユニットはありません。
	接続中の通信ユニットが 1 台のみです。
	接続中の通信ユニットが 2 台です。
	接続中の通信ユニットが 1 台で、この RIO において通信ユニットもしくは IO ユニットのエラーが発生しています。
	接続中の通信ユニットが 2 台で、この RIO において通信ユニットもしくは IO ユニットのエラーが発生しています。
	通信ユニットが 1 台の RIO です。 定期的なシステム構成の確認、更新は行っていません。
	通信ユニットが 2 台の RIO です。 定期的なシステム構成の確認、更新は行っていません。

8-2 通信ユニットアイテム

表 8-2 通信ユニットアイテムのアイコン表示と状態説明

アイコン	状態
	この通信ユニットは切断中です。
	この通信ユニットは接続中です。 定期監視中の時、本アイコンは点滅します。
	この通信ユニットは接続中で、エラーが発生しています。

8-3 IO ユニットアイテム

表 8-3 IO ユニットアイテムのアイコン表示と状態説明

アイコン	状態
	コンフィグレータで実装状態と認識している IO ユニット 定期的なシステム構成の確認、更新は行っていません。
	タイマーでシステム構成の確認をしており、プロセスデータの取得中の IO ユニットです。
	タイマーでシステム構成の確認をしており、プロセスデータ取得停止中の IO ユニットです。
	タイマーでシステム構成の確認をしておらず、コンフィグレータで未実装状態としている IO ユニットです。 または、タイマーでシステム構成の確認をしており、コンフィグレータでもユニット本体の方でも未実装状態である IO ユニットです。
	コンフィグレータでは未実装状態で、ユニット本体の方では実装状態の場合、 または、コンフィグレータで実装状態で、ユニット本体の方では未実装状態の場合、 または、コンフィグレータでもユニット本体でも実装状態であるが、IO 種別が異なる場合のいづれかの状態の IO ユニットです。
	タイマーでシステム構成確認をしておりプロセスデータ取得中にエラーが発生している IO ユニットです。
	タイマーでシステム構成確認をしておりプロセスデータ停止中にエラーが発生している IO ユニットです。